

ハマベゾウムシ *Aphela gotoi* (Chûjô et Voss)

【選定理由】

砂浜が発達する自然海岸に限って生息するゾウムシで、愛知県知多半島産および三重県津市産の標本を基に記載された種である。知多半島では既に絶滅したとみられていたが、2015年に再発見された。1992年に発見された表浜の生息地では、比較的良好な環境が保たれている。近年、アマモ場の復活とともに各地で再発見されており、伊勢湾の対岸である三重県の海岸でも再発見されたことから、ランクを準絶滅危惧に下げた。

【形態】

体長 3.8~5.2mm。赤褐色で脚は頑強で短く、ずんぐりした体型をした小型のゾウムシ。前けい節端の外角は細長く突出し、後けい節端には三日月型の外室がある。

【分布の概要】

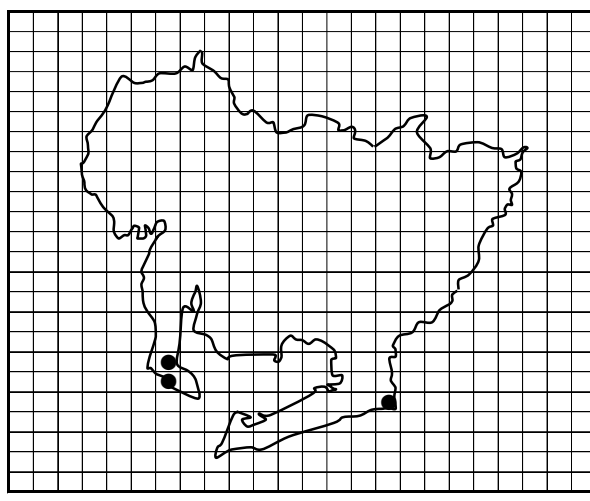
【県内の分布】

南知多町（絶滅）、美浜町（長谷川ほか、2016）、豊橋市（長谷川・蟹江、1990）。

【国内の分布】

本州、九州に分布する。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

砂浜の発達した海岸に生息し、海岸に打ち上げられたアマモを食べる。成虫は、ほぼ一年中みられるが、5月頃に最も多く、打ち上げられたアマモの下、あるいは砂中に埋まったアマモから見つかる。

【現在の生息状況／減少の要因】

1956年に南知多町内海海岸で発見されたのが県内での最初の記録で、この標本が副基準標本に指定されている。しかし、60年代以降の伊勢湾・三河湾の環境悪化とそれともなうアマモの壊滅的な減少から伊勢湾、三河湾沿岸からは姿を消した。もうひとつの生息地である豊橋市の表浜海岸では、比較的安定して生息しているが、この数年はアマモの漂着量が少なく心配される。その一方で知多半島では2015年に約60年ぶりに再発見され、続いて隣県の三重県津市の海岸でも再発見されており、伊勢湾、三河湾のアマモの復活に伴い全県的には回復傾向がみられる。

【保全上の留意点】

現在の生息地である豊橋市の表浜海岸は、県内に残された数少ない自然海岸で、これまでの調査から、高い生物多様性を維持する極めて重要な地域である。現在残る自然海岸の保全はもちろんのこと、現在の生物多様性を維持するには背後の山林の保全も必要である。さらに海水を汚さないために、周辺水域へ汚水が流入することのないよう、十分な配慮が必要である。なお、豊橋市表浜での個体群を支えているのは、浜名湖から漂着するアマモであり、浜名湖の環境保全も本種の保全には重要である。

【特記事項】

豊橋市の表浜海岸は、日本昆虫学会自然保護委員会によって、「昆虫類の多様性保護のための日本の重要な地域」に選定されている。

【引用文献】

長谷川道明・蟹江 昇, 1992. 豊橋市表浜海岸の海浜性甲虫類. 豊橋市自然史博研報, (8): 41-48.  
長谷川道明・金 郁彦・大場裕一, 2016. 知多半島で確認されたハマベゾウムシについて. 豊橋市自然史博物館研究報告, (26): 19-21.

【関連文献】

佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.

(伊澤和義)